



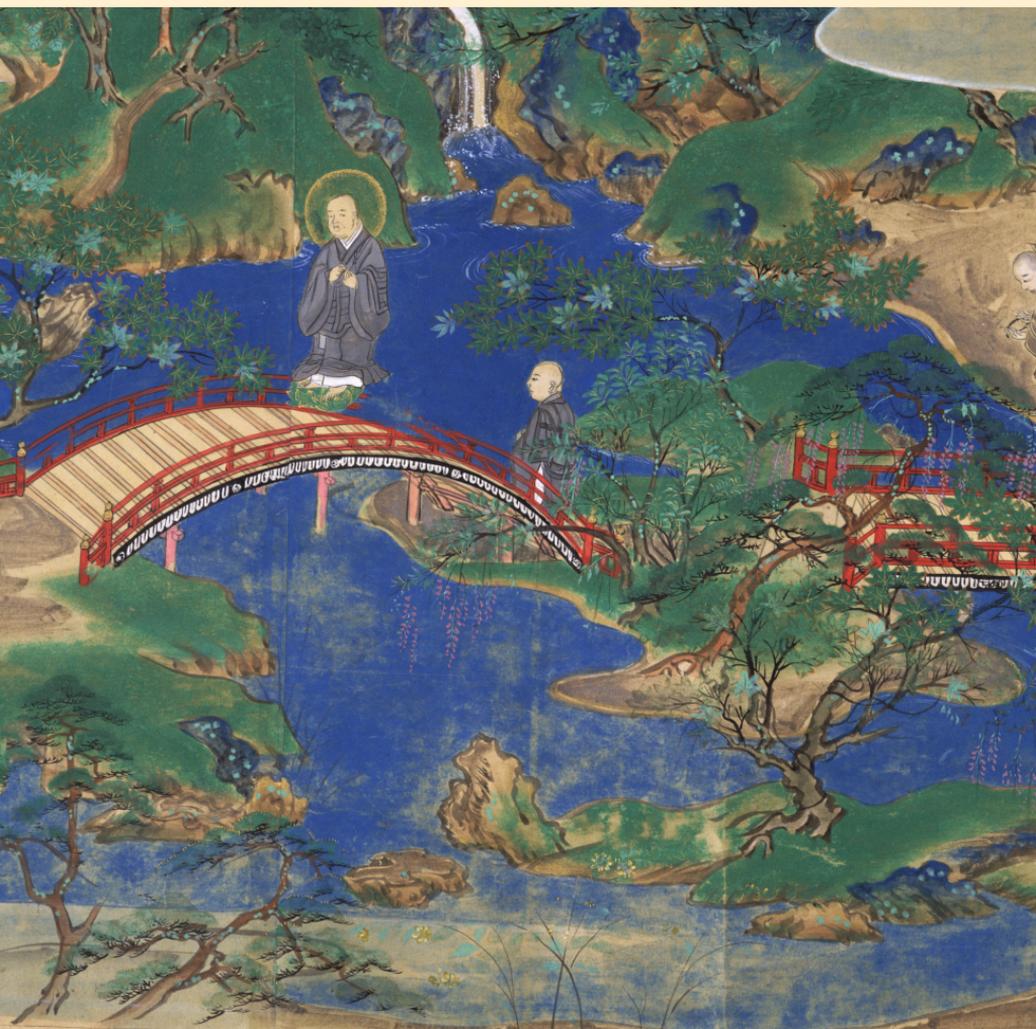
地人館 E-books
Compact 6

デモ版 pdf

鎌倉仏教の新潮流を開いた
専修念仏の祖・法然の遺言

一枚起請文 ❖ 原文と現代語訳

田中治郎 訳・解説



【扉】

法然上人絵傳（模写）

この絵伝は鎌倉時代末期につくられた絵巻物で「法然上人行状絵図」ともよばれる。また、巻数から「四十八卷伝」ともいう。表紙はその巻8「頭光踏蓮」の場面である。

それは中国浄土教の祖師＝善導大師の夢告を得て専修念仏の確信に至ったのちのことであった。元久2年（1205）年4月5日、信徒の九条兼実の屋敷（月輪殿）で説法をした。その帰り、ひれ伏した兼実が顔を上げると、法然上人は宙に浮いて池の蓮の踏んで歩み、頭上に円光が架かっていたという。

東京国立博物館蔵

ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)



地人館 E-books デモ版

*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

田中治郎 (たなか じろう)

1946 (昭和 21) 年 宮城県生まれ

文筆家。日本ペンクラブ会員

横浜市立大学卒業後、出版社に勤務して主に児童書、仏教書の編集に携わる。現在は、仏教書、エッセイ、小説などの執筆や講演活動にあたる。

[主な著書] 『世界の地獄と極楽がわかる本』 『折れない心をつくる名僧の言葉』 (PHP 研究所)、 『なぜか人徳が身につくブツダの法則』 『なぜか運を呼び込むブツダの法則』 (佼成出版社)、 『面白いほどよくわかる日本の宗教』 『面白いほどよくわかる日本の神様』 『面白いほどよくわかる親鸞』 (日本文芸社) 『仏教のことが面白いほどよくわかる本』 『釈迦の教えが面白いほどよくわかる本』 (中経出版)、 『生き方を学ぶ仏教入門』 『禅の言葉 100』 『歎異抄◆原文と現代語訳』 『親鸞入門』 『修証義◆原文と現代語訳』 (地人館 E-books) ほか多数。

いちまい きしょうもん 一枚起請文

著者 たなかじろう
田中治郎

初版発行 2022 年 5 月 20 日

発行 ちじんかん
地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2022 Jiro Tanaka

はじめに

一枚起請文は、法然の死の二日前、弟子の源智から「肝要の所存、一ふであそばされて、給はりて」と請われて書いたものと伝えられる。いわば法然の遺言である。真筆は、京都の黒谷金戒光明寺に所蔵されている。

写本は数多くあり、現代語に訳すにあたってはどれをテキストに選ぶか迷うところだが、ネット上に「浄土宗公式ウェブサイト」として掲載されていたのでそれを採用させていただくことにした。

法然、正式な僧名は法然房源空だが、その名を聞くと、苦渋の学問道を歩んだ求道者というイメージがわく。幼少時より秀才の誉れ高く、比叡山では将来を期待されたが、出世栄達にはまったく関心がなく、十八歳で慈眼房叡空の弟子となつて以来四十五年を黒谷で過ごした。その間、京都や奈良の学者たちを訪ねて教えを請い、また比叡山の経蔵にこもつて経典の一大全集である「一切経」を五度にもわたつて読み通したと伝えられる。

それでも彼は納得できる真理と出会うことができず、「出離の道にわずらいて、身心やすからず」と言っている。

法然が真理との邂逅を実感したのは、唐の善導大師著、『観無量寿経疏（観経疏）』に出会ったときと言われる。それ以来法然は専修念仏をもつて浄土宗の法灯をかかげ、生涯を疾駆する。

法然は、仏教の枢要を究めたいわば「智者中の智者」である。その法然が、智を否定し、智者を否定

することになる。智が真の救いとはつながらないことに気づいたからだ。そして彼の追究のたどり着いた先は、専修念仏だった。法然はこの専修念仏の思想を、関白九条兼実くわじやうけんじつの請いによって『選択本願念仏集』せんちやくほんがんねんぶつしゅうとして撰述している。建久九年（一一九八）、六十五歳のときだ。

一枚起請文は、この『選択本願念仏集』の要諦を紙一枚に簡潔にまとめきつたものといえる。一枚起請文は『選択本願念仏集』と一体のものであり、法然の思想を凝縮した一文なのである。（詳細はあとがき「一枚起請文の教え」に記す）。本訳が読者の用に供することを願うばかりである。

田中治郎

【現代語訳全文】

（私たちの説く念仏は、）中国やわが国の知識人たちが申されるような感想念仏、つまり阿弥陀仏や極楽浄土を心に念じるような念仏ではありません。また学問的に追究して、念の意味は何なのかというようなことを解明して称える念仏でもありません。

ただ往生極楽するためには、「南無阿弥陀仏」と声に出して称え、「私は疑いなく往生するぞ」と確信して念仏する以外、別に取り立てて言うこともありません。

ただし、「三三心四修さんじんししゆ」といつて、念仏者の三種の心構えと四種の修行のあり方が説かれますが、これらはみな決意を固め、「自分は南無阿弥陀仏と口に称えて極楽に往生するぞ」と思い定める中におのずと含まれるのです。

これ以外にもつと深遠なことがあるのだなど言えば、阿弥陀仏と釈迦牟尼仏の慈悲からはずれてしまい、阿弥陀仏が衆生を救済するために立てた本願からも漏れてしまうでしょう。

念仏を信じる人は、たとえ仏が一代をかけて積み上げた教えをしつかりと学んだ人だとしても、經典の一字も知らない愚か者の身となつて、知識など持つてない無智の信仰者たちと同列に立ち、智者ぶつた振る舞いをしないで、ただひたすら念仏に励むべきです。

以上は、（私、法然の言葉であることの）証あかしとして、両手の手形を捺しておく。

浄土宗におけるこのころの安らぎとそこに至るための実践は、この一枚の紙に記したことに尽きる。

源空（私、法然）の考えは、いま述べたこと以外にまったく別には存在しない。死後に間違つて受け取られることを防ぐために、ここにその考えを記した。

建暦二年（一二二二年）一月二十三日

署名並びに印